

一般財団法人日本不動産研究所 ①

全国市街地の変遷

——昭和の記憶と次代へ

東洋の「マチュピチュ」

日本三大銅山の一つ別子銅山は元禄3年(1690年)に発見され、以来昭和48年(1973年)に閉山するまで江戸、明治、大正、昭和の283年にわたり、海抜約1200mの地点から採掘を開始し、最後は海抜マイナス約1000mまで掘り、銅を産出した。開坑から閉山まで一貫して住友が経営した、世界でも例のない銅山であるため、貴重な産業遺産や資料などが数多く残った、東洋の「マチュピチュ」である。

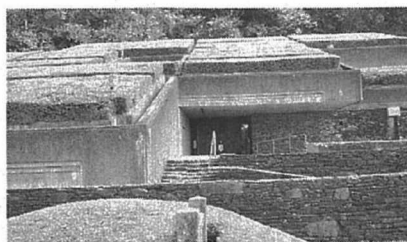
元禄3年泉屋(住友の家号)により現在の旧別子山村の山中から始まり、鉱石の運搬も牛車から、明治26年には日本初の鉱山鉄道へと変化した。採鉱本部も大正5年、別子から東平へ移り、学校、病院、劇場等々からなる人口2700人の天空の町が栄えた。昭和が激増している。

ている。

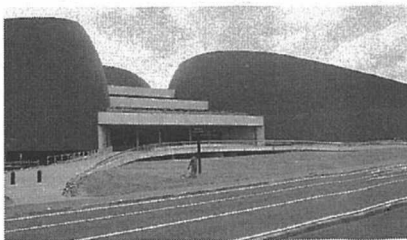
トピア別子、東平(とおなる)ゾーン」として観光施設となっている。

観光施設を整備

さらに昭和5年、採鉱本部が東平から端出場に移され、最後の拠点地区として栄えた。現在は「マイントピア別子端出場(はでば)ゾーン」としてレストラン、温泉施設、鉱山鉄道、観光坑道などからなる新居浜市を代表する観光施設となり、16年4月15日リニューアルオープンし観光客を増加している。



別子銅山記念館



15年に開業した「あかがねミュージアム」

発展の原動力は今後も「銅山開発スピリッツ」

貴重な産業遺産を生かす

和43年すべての建物は撤去され森へと化した。貯蔵庫跡など産業遺産が数多く残り、予定もあり、新居浜市は別子銅山に関連する産業遺産など

今後、旧端出場水力発電所を耐震補強し、一般公開する。製錬所から出るガスにより農作物に煙災が生じたことで、四阪島に製錬所を移し、船で鉱石を送って製錬していた。

3000万トンの鉱石が掘り出され、72万トンの銅を産出した。製錬所から出るガスにより農作物に煙災が生じたことで、四阪島に製錬所を移し、船で鉱石を送って製錬していた。

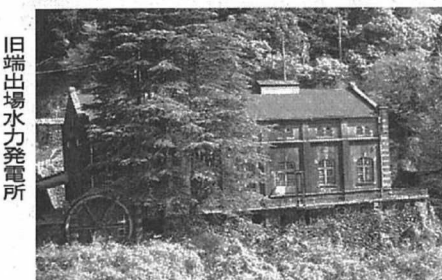
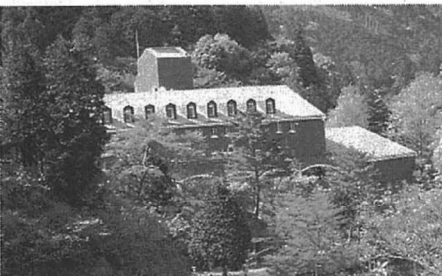
別子銅山によって発展した新居浜は、その後住友により機械、化学工業を中心とする工業都市へと変ぼうとして、住友の企業城下町として発展してきている。J

今回から新シリーズを掲載します。全国の都市は昭和期に大きな発展を遂げて平成を迎えた後、バブル崩壊を経験して既に29年。長引く不況を通じて大都市と地方の格差は広がりましたが、どこい、新たな可能性を求めて地方都市の奮闘は続いています。そうした各地の挑戦や取り組みなどを紹介します。(編集部)

愛媛県新居浜市 別子銅山で発展する工業都市



マイントピア別子の入り口(上)と外観



旧端出場水力発電所